

藻場造成海域の現状
～藻場造成の試みから約 10 年 豊かな魚介類を育む四季藻場へ～

栽培・深層水課 副主幹研究員 松村 航

1 背景・ねらい

近年、全国的に海藻群落（藻場）が衰退あるいは消失する「磯焼け」が発生している。藻場は食用としての海藻を収穫するだけの場ではなく、アワビ・サザエ等の磯根資源や稚仔魚の保護・育成に必要不可欠な場所でもあり、安定した漁業生産に欠くことのできないものとなっている。富山県沿岸には、約 300 種の実藻および海草が生育しており、それらからなる藻場は、総面積約 1,100ha（富山湾漁場環境総合調査 2001, 2011）である。現在のところ、富山県においては、磯焼けと呼ばれるような大規模な海藻群落の長期的消失は認められていないが、特にテングサ場などの四季藻場の衰退が懸念されている。

本研究では、貧植生海域に、陸上水槽で育成した海藻を移植することで、藻場の造成を試みた。約 10 年後、ホンダワラ類の大群落となり、藻場の造成に成功したので報告する。

2 成果の概要

海藻の移植は、2010 年と 2011 年に魚津市の仏田沖（水深 8m）の一年中貧植生な海域で行った（図 1）。移植方法は、数種の実藻を付着させた育成ロープ（10m）の設置（図 2）と、海藻を発生させたブロックを食害生物から防御するための囲い網（5m×5m）内外に設置して行った。なお、移植海藻は、ホンダワラ類のアカモク、ノコギリモク、ヤツマタモク、フシスジモク、テングサ類のマクサ、コンブ類のツルアラメなどとした。

上記の方法で海藻を移植した結果、移植した海藻は食害を受けることなく生長し、成熟した（図 3, 4）。移植 1 年後から小型の一年生の実藻が春季に繁茂し始め、移植 3 年後には移植したホンダワラ類の幼体、マクサおよびツルアラメの幼体が周辺海域に出現し始めた。海藻移植から 10 年後、ホンダワラ類による 1 ヘクタール以上の大群落（被度 25% 以上の四季藻場）となっており（図 5）、多様な生物の住処や繁殖場となっていた。

3 成果の活用面・留意点

本研究で行った藻場造成手法により、県内沿岸域の貧植生海域においても藻場造成の可能性を見出した。なお、藻場の造成を行う際には、その海域に適した海藻の選定や環境状況を考慮する必要がある。

4 問い合わせ先

富山県農林水産総合技術センター 水産研究所 栽培・深層水課

担当：松村 航

TEL 076-475-0036

(参考) 具体的データ

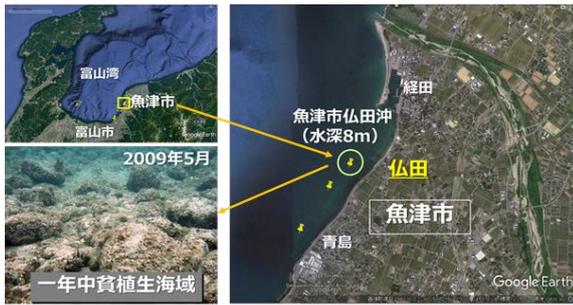


図1 藻場造成海域

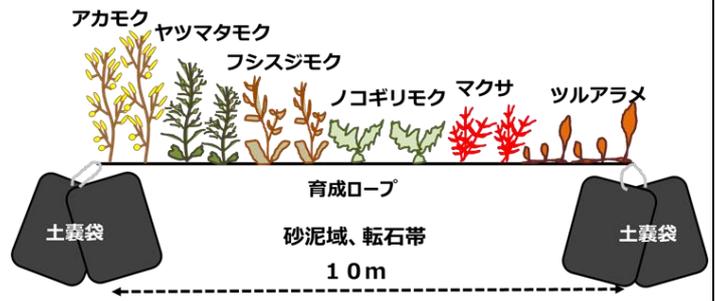


図2 海藻を付着させた育成ロープの設置

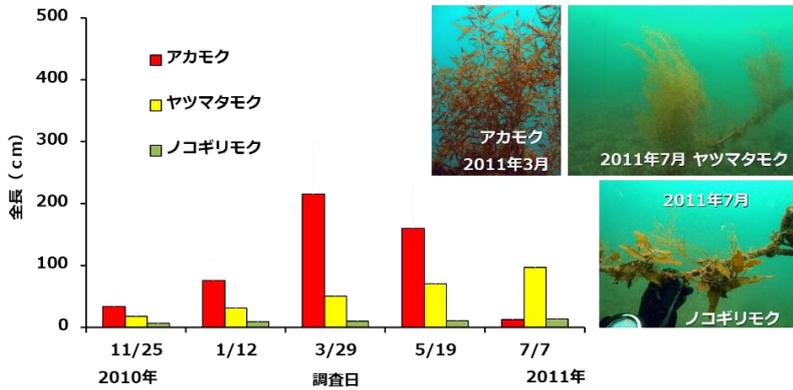


図3 育成ロープにおける移植海藻の生長

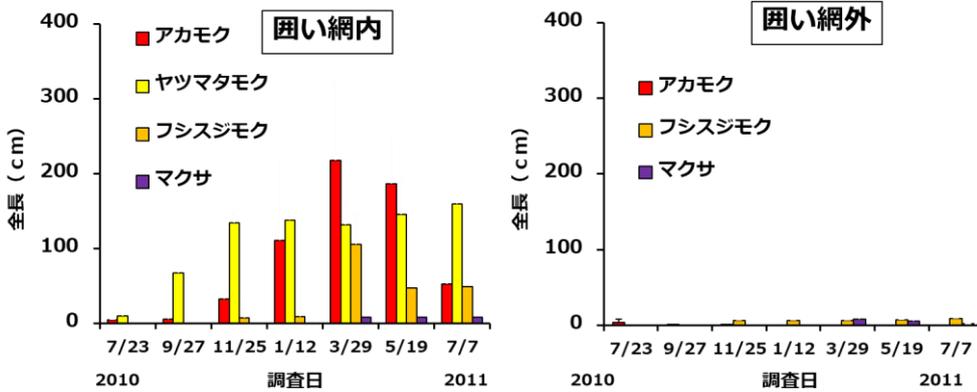


図4 囲い網内外における移植海藻の生長

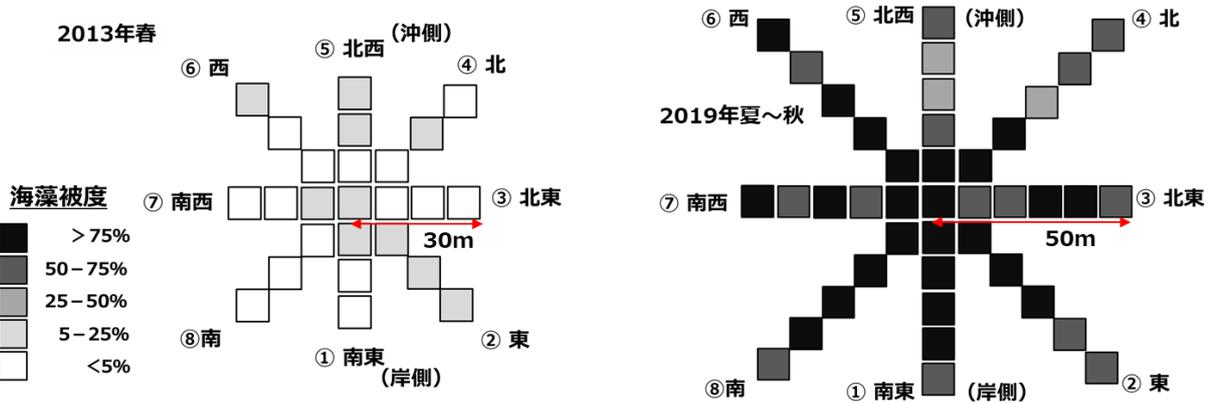


図5 2013年(左)と2019年(右)の海藻移植周辺海域の被度